

私たちの遊ぶのを見ていたのです。この杉もみんなその人が植えたのだそうです。ああ、全くたれが賢く、たれが賢くないかわかりません。ただどこまでも十力の作用は不思議です。ここはもういつでも子供たちの美しい公園です。どうでしょう。ここに度十公園林と名をつけて、いつ迄もこの通り保存するようにしては。」

「これは全くお考えつきです。そうなれば子供らもどんなにしあわせか知れません。」

さて、みんなその通りになりました。

芝生のまん中、子供らの林の前に、

「度十公園」と彫った青い橄欖岩の碑が建ちました。

昔のその学校の生徒、今はもう立派な検事になったり、将校になったり、海の向こうに小さいながら農園を有ったりしている人たちから、沢山の手紙やお金が学校に集まって来ました。

度十のうちの人たちは、ほんとうによることで泣きました。

全く全く、この公園の杉の黒い立派な緑、さわやかな匂、夏の涼しい陰、月光色の芝生が、これから何千人の人たちに、本当のさいわいが何だかを教えるか、教えられませんでした。

そして林は、度十のいた時の通り、雨が降っては、すき徹る冷たい雫をみじかい草にボタリボタリと溶とし、お日さまが輝いては、新しい奇麗な空気をさわやかにほき出すのでした。

(宮沢賢治作 「度十公園林」より)